

Title	聖なる予言者から悪魔的な魔術師へ： ロベール・ド・ボロンの三部作と中世英語の『散文マーリン』
Sub Title	From a holy prophet to a diabolic magician: Robert de Boron's trilogy and the Middle English Prose Merlin
Author	田口, 綾子(Taguchi, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.341(34)- 355(20)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0355">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0355</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 聖なる予言者から悪魔的な魔術師へ

ロベール・ド・ボロンの三部作と

中世英語の『散文マーリン』

田口 綾子

魔術師マーリンは、気味悪い外見をしている上に、超人的な特殊能力を有している。故に、彼はアーサー王ロマンスにおいて一際目立つ存在となっている。悪魔と人間の女性との間に誕生した彼は、「悪魔の遺産」とも言うべき特殊能力、すなわち魔術<sup>④</sup>を用いて何世代もの王の治世に渡り華々しい活躍をした後、実に不可解な末路を辿り、物語から姿を消す。15世紀中葉に成立した中世英語の『散文マーリン』には、誕生から謎めいた末路に至るマーリンの生涯、及びマーリンの華々しい活躍に関する情報が数多く含まれている。この作品のもとになったのは、ロベール・ド・ボロン（1200年頃活躍）の三部作、『アリマタヤのヨセフ』、『メルラン』、『ペルスヴァル』である。古仏語で書かれたロベール・ド・ボロンの作品では、マーリンの不思議な出生が悪魔の陰謀によるものと初めて説明され、以後のアーサー王ロマンスはキリスト教色を強めていく。だが、ロベール・ド・ボロンの三部作と『散文マーリン』の間には、大小様々な相違点が認められる。本論文は、中世後期の魔術観や悪魔観の記述を含む14世紀のキリスト教の基本教義書*Ayenbite of Inwyt*、<sup>⑤</sup>13世紀のトマス・アクィナスの*Summa Theologica*、13世紀に成立したバルトロメウス・アングリクスによる中世の百科事典*On the Properties of Things*なども用いつつ、両作品を比較する。そして、『散文マーリン』という作品の性格及びこの作品におけ

るマーリンの役割を論じる。

ロベール・ド・ボロンの三部作の第一部に当たる『アリマタヤのヨセフ』で描かれるのは、聖杯と円卓の起源、聖杯がアリマタヤのヨセフ一行によりブリテン島にもたらされる経緯である。なお、この作品にはまだマーリン自身は登場せず、彼の名前への言及も無い。マーリンが登場するのは、第二部の『メルラン』からである。『メルラン』は、地獄における悪魔達の謀議に始まり、マーリンの誕生と歴代国王の時代における活躍を描き、15歳のアーサー王の即位で終わる。第三部の『ペルスヴァル』は、騎士パーシヴァルの犯した過ち、アーサー王の王国全土を覆った呪い、パーシヴァルの聖杯探索と探索の成功を描く。聖杯探索が終わった後物語は急展開し、アーサー王の大陸遠征、留守を預かる甥のモードレッドの裏切り、アーサー王とモードレッドの戦い、アーサー王の最期とその後の出来事が手短かに語られる。

いずれの作品においても、物語の冒頭部分で怒りに燃えるサタン (the Devil) とその配下の悪魔達が神に対する復讐を企て、悪魔の力と意思を受け継いで人間を欺く者を生み出そうと決意する。そして、悪魔は金持ちの男の一家を破滅させた後、一家の長女の寝室に侵入し彼女を身籠らせる。この場面以降、両作品には何点かの違いが認められる。

マーリン誕生の直前、マーリンの母親の信仰心と改悛を知った主 (the Lord) の意思により、悪魔の計画が頓挫するのだが、両作品のこの場面において、悪魔が自分の子供に継承させようとした能力は次の様に記されている。

[...]the Devil wanted the child to inherit his power to his power to know all things said and done in the past, he did indeed acquire that knowledge;<sup>(3)</sup>

[...]that he hadde ordeyned that the childe to haue his arte and witte to knowe alle thynges don, and seide,bothe that were paste and that were to come.<sup>(4)</sup>

悪魔の特殊能力の描写に関しては、両作品間で決定的な差異がある。ロベール・ド・ボロンの『メルラン』で悪魔がマーリンに継承させようとしたのは、過去を知る能力のみである。だが、『散文マーリン』では、過去を知る能力のみならず、来るべき出来事を知る力をも悪魔から授かっているとされている。<sup>9</sup>この点を考慮すると、後者における悪魔の力はより驚異的であり、マーリンに及ぼした影響もより大きいと言えよう。更に悪魔の影響力の差は、物語の進行と共に顕著になるマーリン像の差異にもつながったとも考えられる。

主はマーリンの母親の敬虔さと贖罪を考慮して、マーリンを罰しないと決める。だが、悪魔の子マーリンには一つの選択肢が残された。すなわち、彼が悪魔の僕となるか神の僕となるかは、彼次第なのである。両作品、とりわけ物語後半におけるマーリン像の差異を考察する上で、この点には留意しておく必要がある。

悪魔の子マーリンはいずれの作品においても、毛むくじらの醜い姿で生まれ、母親と侍女達を仰天させる。誕生後間もなく、主の意思によりマーリンは洗礼を受けるのだが、両作品のこれ以降の場面に認められるのは、マーリンが洗礼のために塔から連れ出された時の様子、マーリンの成長速度、母親の侍女達が実家へ帰る時期といった、細かい相違点のみであり、両作品の構成や性格、誕生直後のマーリン像には差異が生じていない。

マーリンの母親は姦通罪で処刑される事を恐れて涙に暮れるが、マーリンはあたかも全てを見越しているかのように「それは有り得ないから、恐れる必要はない」と言い、母親及び母親のもとから立ち去らんとする侍女達を驚嘆させる。両作品におけるこの場面には、彼の精神面の早熟さが見て取れる。肉体の成長に合わせて、マーリンの精神面も驚異的な速さで成長しており、彼の怪異性を一段と強めている。<sup>10</sup>やがて、母親は法廷への出頭を命じられる。幼いマーリンも母親に同行、理路整然と裁判官の質問に答えて母親を弁護する。マーリンと裁判官との問答の中に、細かい相違点が含まれている。自分の父親について尋ねられた時、『メルラン』におい

て、マーリンは‘Hequibedes’という悪魔の一種と答える。(p.60) だが、『散文マーリン』では、「空中に住む敵」としか記されており (I, 20)、父親の属する種類については説明が曖昧になっている。

裁判官の母親の姦通罪を暴露した後、マーリンと母親は釈放されて帰途につく。その際マーリンは自らの運命を予言し、自分が語る事全てを書きとめるよう、隠者ブレイスに依頼する。両作品においてこの場面が続くのは、ヴォルティゲルン王の即位、堅牢な塔の崩壊、占星術に精通した七人の学者による進言、ヴォルティゲルン王の前で行われるマーリンの予言である。これらの場面に含まれる相違点は、ブレイスとの会話におけるマーリンの祖母への言及の有無、草原で遊ぶ子供達の様子描写といった、細かいものにとどまっており、物語の構成と性格にも差異は認められない。人々を驚嘆させる幼い知恵者、予言者としてのマーリン像も両作品に共通している。

ヴォルティゲルン王の死後、両作品中のマーリンはペンドラゴン（アウレリウス・アンブロシウス）とウーゼルの兄弟のもとで活躍する。サクソン人との戦争に際しては軍師としての能力を発揮し、サクソン人の撃退に貢献する。後に生じたサクソン人との戦いでペンドラゴン王が戦死しウーゼルが即位すると、マーリンは、魔法でアイルランドから巨石を運び、ソールズベリー平原にペンドラゴン王の墓碑を造る。ここに認められる相違点は、ソールズベリー上空に赤い竜が出現した時期、竜が意味するものの、ストーンヘンジという固有名詞の有無、ウーゼル・ペンドラゴンという名の由来のみであり、これらの相違点は荒筋、作品の性格、作品中のマーリン像に何の影響も及ぼさない。

マーリンの次なる業績は円卓の設立である。この場面以降、両作品が物語の展開、性格、マーリン像において決定的な違いを示す。マーリンは聖杯と聖なるテーブルの伝説を語り、三位一体の名において三つ目のテーブルを造るよう、ウーゼル王に進言する。一つ目のテーブルとは、最後の晩餐において使用されたテーブルのことであり、二つ目は、アリマタヤのヨセフによって造られたテーブルである。第一部『アリマタヤのヨセフ』で

既に詳しく語られた円卓と聖杯の伝説が、『メルラン』中のこの場面で繰り返し記される形になっている。『散文マーリン』では、この場面で初めて円卓と聖杯の起源が語られるのである。円卓の完成後、マーリンは円卓に相応しい騎士50人を選出する。円卓には一つだけ空席があり、マーリンの説明によれば、この席に座る資格を有する騎士が、次の王の時代に誕生するという。マーリンは予言を終えると、宮廷を後にしてブレイスを訪ねる。両作品中のこの場面には、注目すべき相違点がある。『メルラン』では、「Alain li Grosの息子」と空席を満たす人物の血統が明記されている上、この人物による聖杯探索の成功が空席を満たす条件であると記されている。<sup>6)</sup>この人物は他ならぬ聖杯の騎士パーシヴァルである。この要素は『メルラン』と聖杯伝説の密接な結びつきを想起させる。『メルラン』が聖杯探索の準備段階の物語であると示唆し、第三部における聖杯探索の成功を予告しているかのようなのである。だが、『散文マーリン』では、「次世代の王の時代に空席が満たされるであろう。」とマーリンが予言するのみであり、空席を満たす人物及び空席を満たす為の条件に関しては特に説明されておらず<sup>6)</sup>、『散文マーリン』では、聖杯探索が重視されていないという印象を与える。もう一つの相違点は、不相应な者が空席に腰掛けた時に生じる災いである。ロベール・ド・ボロンの三部作では、第一部『アリマタヤのヨセフ』において空席の災い——ヨセフ一行の一員であるMoyseという罪深い人物が道中で空席に腰掛けた途端、深淵へと消え、二度と姿を現さなかった (p.38) —— が既に語られているためか、ここでは繰り返されていない。翻って『散文マーリン』にはヨセフの旅の物語が含まれていないため、この場面で初めて空席の災いが描かれることになる。マーリンが長らく宮廷に姿を見せなかったため、「マーリンは発狂して荒野をさまよううちに、農夫に殺害された」と、騎士達は確信する。そして、一人の騎士がマーリンの忠告を無視し、空席に腰掛ける。すると、この騎士の身体は鉛のように重くなり、下へ下へと沈む。(I, 63) 全てを知るマーリンは再び宮廷に顔を出し、「いかなる者をも空席に座らせてはならない」と、ウーゼル王に忠告する。『メルラン』が三部作の一部であるのに対し、『散文マー

リン』が独立した作品である点を考慮したら、こうした差異が生じるのはごく自然なことであろう。

ウーゼル王亡き後、神に選ばれた君主の出現を予言し、マーリンは隠者ブレイスのもとへ向かう。マーリンが再び人前に姿を現すのは、15歳のアーサー王が即位した後である。マーリンの再登場に至るまで、両作品における物語の展開は同じであるが、細かい相違点が数点含まれている。すなわち、マーリン登場の時期、アーサー王に忠誠を誓った諸侯と叛旗を翻した諸侯に関する記述の有無である。更にここで注目すべき相違点は、マーリンがアーサー王に語った事である。『メルラン』では、この物語と聖杯伝説との密接な結びつきを再確認させるかのように、マーリンの口から聖杯伝説が再び語られ、更に聖杯探索成就が予言される。両作品のこの場面には、以下のような差異が生じる。それは、作品の構成及び性格の差異に起因するものである。『メルラン』中のマーリンは次の様な台詞を口にして、アーサー王の宮廷を去る。

‘[...] I must go now: I can be in this world no longer, for my Saviour will not grant me leave.’<sup>(9)</sup>

マーリンは主の意思により、この世にとどまることができないという。三部作の一つである『メルラン』には、聖杯の騎士パーシヴァルを主人公とした物語『ペルスヴァル』が続く。故に、第三部につながるように第二部『メルラン』を締めくくらねばならず、マーリンの活躍を中心的に描き続ける事はできないのである。聖杯探索の物語と切り離された『散文マーリン』には、こうした台詞は無く、マーリンもこの場面では宮廷を去らない。そして、以後、彼は度々政治、軍事両面でアーサー王と円卓の騎士達に助言をし、戦場では多種多様な魔術を用いて敵軍に大打撃を与える。国内の諸侯がアーサー王に対して叛旗を翻した直後、彼は火を吐く可動式の dragon-banner<sup>(10)</sup>を造り、また、炎や風や水を自在に操る。『散文マーリン』では、これ以降の場面が、恐るべき魔術師たる彼の華々しい活躍の場とな

るのである。

マーリンがアーサー王の宮廷を去ると共に、第二部『メルラン』は終わり、第三部『ベルスヴァル』に進む。この物語の前半部分にマーリンは登場せず、聖杯の予言者としてのマーリンの名に3度言及される (p.116, p.119)。またマーリンは姿を消したまま、冒険中のパーシヴァルに漁夫王の城への道を教える (p.140)。彼が再び姿を現すのは、物語の中盤である。パーシヴァルは全てを知るマーリン (上品な身なりをした農夫の姿を取り、肩に鎌を担いでいる) と遭遇、誓いを破ったことを非難される。だが、マーリンはパーシヴァルを許し、漁夫王の城への道、及び城で成すべき事を教える。(pp.153-4) この場面に登場するマーリンは、聖杯探索成功の鍵を握る人物であると言えよう。

パーシヴァルは再び漁夫王の城で聖杯を目にし、聖杯の効能について質問する。すると、漁夫王はたちどころに回復し、恍惚のうちに昇天する。王国全土からも呪いが消える。間もなく、マーリンが宮廷に姿を現し、新たな聖杯の守護者となったパーシヴァルを漁夫王の城へ連れて行く。(pp.154-6) かくして聖杯探索は成就し、マーリンもこうして自ら探索の最後の仕上げ——『散文マーリン』中の彼が決して成し遂げない仕事——をした後、聖杯探索の予言者及び導き手としての役割を全て終える。

この場面以降マーリンが登場するのは、物語の結末部分である。この時点でアーサー王はモードレッドとの戦いにて瀕死の重傷を負い、アヴァロンへと運ばれている。マーリンは全てをブレイスに語った後、ブレイスと共にパーシヴァルの守る聖杯の城へ行き、主の意思より、この世を離れる時が来たと告げる。その際、彼は以下のような台詞を口にする。

‘[...] I shall live in eternal joy. Meanwhile I shall make my dwelling-place outside your house, where I shall live and prophesy as Our Lord shall instruct me. And all who see my dwelling-place call it Merlin’s *esplumoir*.’<sup>(11)</sup>

アーサー王の治世が終わった後、マーリンは自らの手で*esplumoir*なる不



思議な空間を自らの手で造り出し、神の教えの下、永遠の歓喜に満たされて生きる。しかし、『散文マーリン』では、この超人的な魔術師も愛欲に溺れて美しい愛弟子ニムエに魔術を次々と伝授し、最後には彼女に魔法を掛けられて眠らされた上、魔法の塔に幽閉される。彼はこの世から姿を消す際に、神や主の名を口にしない。彼はアーサー王の治世も終わらぬうちに、このような末路を辿る。故にもはや、アーサー王の王国にいかなる形でも関与できない。もう一つ見逃してはならない点がある。すなわち、『散文マーリン』ではマーリン消滅が完全に彼の意思によるものではない。不思議な世界を形成したのがマーリン自身でないという事からも、この点は明らかである。更に、消滅が自分の意に適っていないと示唆するかのよう、彼は騎士ガウェインに向かって、次のように言う。

“[...] I am such a fole that I love a-nother better than my-self, and haue hir lerned so moche, where through I am thus be-closed and shette in prison, [...].”<sup>(12)</sup>

上記の発言から読み取れるのは、マーリンは己の浅はかな行為を嘲笑うと共に後悔している事、マーリンが魔法の塔内で必ずしも喜びに満ちた日々を送ってはいない事である。

ロベール・ド・ボロンの三部作と『散文マーリン』の比較を通して、両作品中のマーリンの役割の違いが見えて来る。まずは、両作品中におけるマーリンの魔術及びマーリンと聖杯探索の関係である。前者では彼の使用する魔術が予言と変身に限られており、彼は火を吐く dragon-banner を造りもしなければ、炎や風や水を操って敵軍を攻撃することもない。つまり、ロベール・ド・ボロンの三部作では、マーリンも恐るべき魔術師としては活躍しない。むしろ、聖杯探索の下準備をし、聖杯探索を成功に導く予言者として重要な役割を果たしている。マーリンが予言をし、将来の計画を練るのも、全て聖杯探索成就のためである。<sup>(13)</sup>マーリン無くして聖杯探索の成功は有り得ず、聖杯探索はマーリン抜きには語れない。要するに口

ベール・ド・ボロンの三部作に登場するマーリンの活動領域は、より神聖で宗教的なものである。『散文マーリン』でも彼は聖杯の出現を予言する。(II,304) だが、彼自身は聖杯の出現を待たずに姿を消してしまい、直接探索に関与しない。そして聖杯の騎士パーシヴァルも『散文マーリン』には登場せず、聖杯探索自体も描かれない。この作品でマーリンが能力を発揮するのは、主に政治や軍事といった世俗的な領域である。もう一つの問題点は、マーリンの悪魔的な側面が表出する度合いである。ロベール・ド・ボロンの三部作でも、彼は身体、精神両面の早熟さや膨大な知識故に悪魔と呼ばれる。だが、破壊的な魔術を用いず、ニムエとの情事も描かれないため、彼の悪魔的な側面はさほど強調されない。悪魔と情欲の関連について、ここで重要な点を挙げておく *Ayenbite of Inwyt* によると、七つの大罪の一つである情欲 (lechery) は悪魔の誘惑が引き起こすものである。<sup>(14)</sup> 他方、『散文マーリン』において、マーリンは破壊的な魔術を用いる上、ニムエとの情事という私的且つ邪な目的のために魔法を使用している。こうした傾向は物語が進むにつれて強まり、マーリン自身も目に見えて世俗的で罪深い人物と化していく。中世後期のキリスト教の基本教義では、我欲を満たすために魔術を使用する事は、七つの大罪の一つである貪欲 (avarice) に数えられた。 *Ayenbite of Inwyt* は貪欲と関連づけられる魔術について、次のように説く。

To þise zenne / belongeþ þe zenne: of ham / þet uor pans  
 / makeþ to clepie/ þane dyeuel. and makeþ þe enchauntements.  
 and makeþ to loky ine þe zuord. oþer ine þe nayle / of þe þoume.  
 uor to of-take / þe þeyues. oþer uor oþre þinges. And of  
 ham alsuo þet makeþ / oþer porchaceþ be charms/ oþer be  
 wychecreft. oþer be kuaednesse /huet þet hit by. þet uolk/ þet  
 bye þine spoused / togydere/ ham hatieþ.<sup>(15)</sup>

この教義に照らして解釈すると、『散文マーリン』中のマーリンは好色

(lechery)に加え、貪欲 (avarice) の罪をも犯したことになる。結局、自分の犯した罪のために、彼は自ら予言し準備を整えておきながら、聖杯探索という神聖な活動から除外されてしまうのである。彼は確かに聖杯探索の準備の為にも魔術を用いたが、引き起こされる害の有無を問わず魔術を悪魔と関連づける当時の魔術観からすれば、それすらも許されぬことであった。<sup>(16)</sup>

マーリンの消滅に関して、更なる問題が浮上する。マーリンはこの世から消滅した後に向かったのは、いかなる世界なのか。いずれの作品においても、この不思議な世界を形成するものについては、説明不可能とされている。『散文マーリン』には、マーリンがブレイスの前で自分の末路を予言する場面がある。ここでマーリンは、自分の幽閉される目に見えない世界について、次のように説明する。

[...] circles that shall nother be of Iren ne steile ne tree ne golde ne siluer ne lede ne nothinge of the erthe ne of water ne herbe [...]<sup>(17)</sup>

はっきりとした境界線も持たぬ、かくも不思議な世界には、曖昧模糊としたケルト的な異界<sup>(18)</sup>との関連性が指摘される。だが、こうした解釈のみでは、マーリンの末路の考察としては不十分である。更に、この世から姿を消した後、マーリンは以下のような説明を付け加えている。

[...] it is of the aire withoute eny other thinge be enchauntemente so stronge, that it may neuer be vndon while the worlde endureth.<sup>(19)</sup>

この記述によると、魔法の塔は、空気のようなもので形成されている。ここで再び想起せねばならないのは、悪魔が住む場所である。前述の通り、幼少期のマーリンは悪魔の住処は空気の中だと説明している。そして、バルトロメウス・アングリクス の *On the Properties of Things* には、罪を犯した悪魔の行き場所について、次のような記述が含まれている。

Euel angels assenting to þe will of Lucifer þat fil doun beþe iclosed in þis derk  
aier as it were in prisoun withoute recouer. Hy fil out of li3t into derknes [...]<sup>(20)</sup>

『散文マーリン』中のマーリンが悪魔の子である点と罪を犯した点を考慮すると、消滅後のマーリンが暮らす目に見えぬ謎めいた場所は、ある意味悪魔の子のために用意された牢獄であったのだろう。但し、ロベール・ド・ボロンの三部作では、マーリン自身が示唆するように、この不思議な世界は主の教えに満ちた神聖な祝福された場所である。マーリン自身も物語の進行に伴って、神聖さを高めて行く。それに対して、『散文マーリン』中の魔法の塔は、ただ美しいばかりの場所であり、そこには主の教えもない。塔の中にいるのは、彼を虜にして無力化し、世俗的な人物へと変えたニムエのみである。

マーリンは誕生後直ちに洗礼を受けて、悪魔の影響から一度は解放された。だが、何故このような末路を辿るはめになったのか。この問題に関連して、洗礼の効能の有無も論じなくてはならない。両作品で彼は洗礼を受け、一度は浄化される。しかし、『散文マーリン』では、彼は最終的に墮落して神聖さを喪失した。この問題をどう考えるべきか。トマス・アクィナスは洗礼がありとあらゆる罪を浄化し洗礼を受けた者全てに天国の門を開くとしている。だが、同時に洗礼が無効化される可能性もあると述べる。

[...] this effect is sometimes hindered by insincerity. Wherefore, when this obstacle is removed by Penance, Baptism forthwith produces its effect.<sup>(21)</sup>

この解釈を当てはめると、『散文マーリン』では、魔術の使用と情欲という罪のためにマーリンが受けた洗礼の効能も失われ、天国の門も閉ざされた、ということになる。ロベール・ド・ボロンの作品でも、彼が昇天したとは書かれていない。だが、彼が住処とする不思議な空間には主の教

えがあり、永遠の喜びに満ちているという点で、天国により近い様相を呈していると言えよう。

いずれの作品においてもマーリンは、魔術というキリスト教の教義と相容れぬ要素故に、キリスト教徒の世界に留まることを許されなかった。だが、ロベール・ド・ボロンの作品では、マーリンも最終的な神の側に傾いて聖なる予言者となった。『散文マーリン』では、悪魔の側に傾いて悪魔的且つ世俗的な魔術師と化し、悪魔に相応しい場所に幽閉された。かくなるマーリンの描き方の違いは、なによりもまず、作品の性格の違いに由来する。すなわち、ロベール・ド・ボロンの三部作は聖杯探索を主眼に据え、マーリンを聖杯探索の予言者及び導き手と位置づける。故に魔術、情欲といった中世キリスト教の魔術観や道徳と相反する要素を加えず、恐るべき魔術師としての彼の役割を重視していない。そして彼自身も聖杯探索から除外されず、聖杯探索が成就するまではこの世から消滅しない。逆に、『散文マーリン』には聖杯探索という宗教色の強い冒険物語が含まれていない上、主題も聖杯探索ではなくマーリンの生涯と活躍そのものになっている。また、この作品自体が独立した一つの作品であり、主人公の座にあり続けるのは、あくまでマーリン自身である。故に聖杯探索の予言者に彼の役割を限定する必要もなくなり、世俗的領域でのマーリンの活動をも物語の中心に据えられた。その上、聖杯の騎士パーシヴァルの代わりに美しい愛弟子ニムエを登場させ、マーリンの情欲という中世後期のキリスト教の教義から逸脱した要素を加えることもできたのであろう。主題が聖杯探索からマーリン個人の生涯に、物語の後半でマーリンに接する人物が、パーシヴァルからニムエに置き換えられた。パーシヴァルを主人公とする聖杯探索の物語が削除されたことで、マーリン自身のみならず『散文マーリン』という作品自体の宗教性も薄れた。物語は聖杯伝説から一人の超人的な人物の伝説へ、マーリンは聖なる予言者から悪魔的な魔術師へと大いなる変貌を遂げたのである。

注

- (1) 本稿では*the Middle English Dictionary*における ‘magik’ の定義に従い、魔術 (magic) という語広義の超自然的能力という意味で使用する。‘(a) The knowledge of hidden natural forces (e.g. magnetism, stellar influence), and the art of using these in calculating future events, curing disease, etc...’, ‘(b) sorcery, enchantment’. See *Middle English Dictionary*, ed. by Sherman M. Kuhn, 12 vols (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1952–1999), VI, p.11. いかなるものであれ魔術は悪魔の助け無しに習得できぬものと考えられていた。中世の魔術については、Richard Kieckhefer, *Magic in the Middle Ages* (Cambridge: Cambridge UP, 1998), Jeffrey Burton Russell, *Witchcraft in the Middle Ages* (Ithaca, NY: Cornell UP, 1972), Michael Bailey, ‘From Sorcery to Witchcraft: Clerical Conceptions of Magic in the Later Middle Ages’, *Speculum*, 76. (4), 960–990. を参照。
- (2) *Dan Michel’s Ayenbite of Inwyt or Remorse Conscience*, rev. by Richard Morris, Early English Text Society, Original Series, 23(London: N. Trübner, 1866) この著作はキリスト教の基本教義書 *Somme des Vices et des Vertus* (1279) の、Dan Michel による英訳 (1340) である。
- (3) *Merlin and the Grail: Joseph of Arimathea, Merlin, Perceval: The Trilogy of Prose Romances Attributed to Robert de Boron*, trans. by Nigel Bryant (Cambridge: D.S. Brewer, 2001), p.55. (以下、下線部は執筆者自身による。)
- (4) *Merlin or the Early History of King Arthur: A Prose Romance*, ed. by Henry B. Wheatley, 2 vols, Early English Text Society, Original Series, 10, 112 (London: Kegan Paul, 1865–1899; repr. New York: Greenwood Press, 1969) , I, p.14.
- (5) 『散文マーリン』中の悪魔達の謀議の場面にも、人間を欺く悪魔の子の特殊能力に関する記述がある。‘[...] sholde sithe oon telle alle thymges that were don and seide bothe of that is passed and of that is passed and of thynges that is to come, and be that shoulde he be bilieued of moche peple<sup>1</sup> (I, p.3)’.
- (6) Alexander Micha, ‘Robert de Boron’s Merlin’, trans. by Miren Lacassagne, *Merlin: A Case Book*, eds. by Peter H. Goodrich and Raymond H. Thompson (New York: Routledge, 2003), p.297.
- (7) Robert de Boron, p.94も参照。‘The one who is destined to do so will be born of Alain li Gros, who is here now in this land. Alain sat as Joseph’s precious table, but he has not yet taken a wife, and does not realise he is destined to father this child. The one who will fill the empty seat needs to have been in

the presence of the Grail. The Grail's guardians have never seen what is due to be fulfilled, and it will not happen in your time but in the life of the king who will follow you.'

- (8) "Wite thou right wele that it shall not be in thy time; ne he that shall accom-  
lessen, it is not yet begeten. But it shall be in the kynges tyme that shall  
come next after the; ne he that shall hym engendere shall not knowe that he  
shall hym engendere; and he that shall accomplysshe that sete must also com-  
plysshe must also complysshe the voyde place at the table that Ioseph made.  
[...]." *Merlin*, I, p.61
- (9) Robert de Boron, p.114.
- (10) 'And Merlin made to kyng Arthur a baner wher-in was grete significacion,  
for ther-in was a dragon, which he made sette on a spere, and be semblaunce  
he caste oute of his mouth fire and flame, and he hadde a grete taile and a  
longe. This dragon no man cowed wite where Merlin it hadde, and it was  
merveilouse light and movable; and when Merlin it was set on a lance thei  
beheilde it for grete merveile.' *Merlin*, I, pp.115-6. 中世においては、機  
械は魔術と見做され、機械技師は魔術師と同一視されていた。何故な  
ら、当時、機械技術は師匠から弟子へと秘密のうちに伝授されるもの  
であり、また、秘密の力で人間の自然支配を助けると考えられていた  
からだ。機械技術と魔術の関連性については、A. C. Crombie, *Science,  
Optics and Music in Medieval and Early Modern Thought* (London: The  
Hambledon Press, 1990), William Eamon, 'Technology as Magic in the Late  
Middle Ages and the Renaissance', *Janus : revue internationale de l'histoire  
des sciences de la médecine, de la pharmacie et de la technique*, 70 (1983),  
171-121に詳しい。なお、Richard Kieckheferも *Magic in the Middle Ages*  
(Cambridge: Cambridge UP, 1998), pp.100-2で、中世の機械技術について  
述べている。
- (11) Robert de Boron, p.172. 訳者Nigel Bryantも註において *esplumoir* という単  
語は、翻訳できないと述べている。
- (12) *Merlin*, II, p.694.
- (13) Arthur Edward Wait, *The Holy Grail: Its Legends and Symbolism* (London:  
Rider and Company, 1933), p.159.
- (14) *Ayenbite of Inwyt* pp.240-1.
- (15) *Ayenbite of Inwyt*, pp.43-4. pans=pennies, zuord=sword, þeyues=thieves,  
porchaceþ =produces, kuaednesse=wickedness. *Ayenbite of  
Inwyt*によると、悪魔は七つの大罪によって、全世界を自分に惹きつけ  
ると言う。'[...] be huichen/þ e dyeuel dra3þ to him/ ase al þ e wordle.'(p.15)

なお七つの大罪の起源、中世英文学における七つの大罪については、Morton W. Bloomfield, *The Seven Deadly Sins: An Introduction to the History of Religious Concept, with Special Reference to Medieval English Literature* (East Lansing: Michigan State College Press, 1952)に詳しい。

- (16) Ginger Melissa Rudd Lee, *The Devil's Child: Merlin and the Assumption of the Grail* (Athens, GA: The University of Georgia, 1998), p.108.
- (17) *Merlin*, II, p.304.
- (18) 曖昧模糊とした異界の定義については、Nikolai Tolstoy, *The Quest for Merlin* (London: Hamish Hamilton, 1985), p.162を参照。 '[...] it impinged so nearly on the world of the men. At once alluring yet threatening, it hung intangibly near like the reflection of a lakeside scene. The dividing line, which was also the point of juncture, provided in time and space a religion with uncanny propensities.'
- (19) *Merlin*, II, p.693.
- (20) Bartholomæus Anglicus, *On the Properties of Things*, trans. by John Trevisa; eds. by M. C. Seymour and others, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1975), I, p.88. St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, trans. by English Dominican Province, 5 vols (Westminster, MD: Christian Classics, 1981), I, pp.323-4 (Part I, Q. 65 Art. 2).も参照
- (21) Thomas Aquinas, IV, pp.2409-10 (Part III, Q. 69 Art.10)